

なりすましの様は身
大魔王 憎まれたい

Impersonated chaos
wants to be hated

小説●名無しの夜
Story by Nanashinoyoru

イラスト●A.S.ヘルメス
Illustration by A.S.Hermes



試し読み版



BEGINNING NOVELS

KILL TIME COMMUNICATION PRESENTS BEGINNING NOVELS SERIES

"IMPERSONATED CHAOS WANTS TO BE HATED"

STORY BY PANASHINOYORU / ILLUSTRATION BY A.S. HERMES

Contents

プロローグ◆誰も予期せぬ結果	005
第一話◆どうも大魔王です	008
第二話◆怒り	015
第三話◆いただきます	023
第四話◆やっぱりクズでした	037
第五話◆挨拶回り	047
第六話◆付き人として、先輩として	055
第七話◆ローラの提案	063
第八話◆親友の前で1	074
第九話◆親友の前で2	084
第十話◆ミナの弱点1	101
第十一話◆ミナの弱点2	129
第十二話◆奴隷の待遇	156
第十三話◆御三家	167
第十四話◆依頼受託	178
第十五話◆シールド家の方針	198
第十六話◆大魔王の大好物	212
第十七話◆大魔王様ご立腹	221
第十八話◆ノロナの研究室	232
第十九話◆特例主言語	242
第二十話◆ノロナの逆襲	251
第二十一話◆アクイム・ボンボールの正体	263
第二十二話◆呪術師二人と	283
幕間◆ミナとの三日間	300
第二十三話◆清算と始まり	322
エピローグ◆光の王フローリア	344

大魔王

光

プロローグ 誰も予期せぬ結果

「勝負あり」

眼前に展開された光景が信じられなかった。

光の騎士を決める御前試合。

戦うのは幼い時から一緒に練磨し合い、いつしか心惹かれるようになっていた幼馴染みのアトムと、大臣の一人息子であることを鼻にかけては多くの女性を泣かせ続ける最低の男アクイム。

その二人が光の騎士の座をかけて戦った。当然誰もが勝つのはアトムだと思っていた。

光の騎士に選ばれた者はかつて大魔王を倒した一人である光の王から聖剣を貸し与えられ、その力をもってこの世界に存在する魔なる者達を倒す使命を課せられる。

時に巨大な『魔』に単身で挑まなければならないその対価として、光の騎士はこの光の王国において王に次ぐ権力者となる。

それを決める御前試合。注目されない訳がなかった。誰もが試合前からアトムに顔を覚えてもらおうとその周囲に群がり、反対に大臣の息子でありながらもその素行の悪さから嫌悪されているアクイムの周りには、誰一人近づこうとはしなかった。

それに齒軋りするアクイムに当然の報いだと心の中で嘲笑っていたのが、まるで遙か昔のことのようだ。

ある日を境にアクイムが部屋に籠もるようになった。ひよつとすれば御前試合は行われないかも

しれない。そんな噂が流れはしたものの、当日アクイムは何事もなかったかのように姿を現し、そして御前試合は執り行われた。

その結果が眼前の光景だ。アトムは敗れ、アクイムが勝利した。

身体が震える。隣では妹のティアラが私に負けず劣らずの青い顔をしていた。

心配するな。

できることならそう言つてやりたかった。だが……無理だ。そんな余裕は今の私にはない。

ああ。こんなことなら付き人になるかどうかを決める『誓いの義』を断るべきだった。でも私は、いや、誰もが勝つのはアトムだと思つていたのだ。しかし結果は……。

アクイムが私を見る。昔から私やティアラにちよつかいを掛けてくるつまらない男。その男の視線から私を守るようにティアラが前に出るが、最早その行為に何の意味もない。

己の持てる全てで光の騎士をサポートする。それが付き人の役割なのだから。アクイムが望むならば今夜にでも私は忠誠の証としてこの身体を最も嫌悪すべき男に捧げなければならない。光の王の前で付き人になる誓いを立てた以上、相手が嫌いな男だからやっぱり辞めたでは通らないのだ。もしもそんなことをすれば、最悪お家取り潰しの上に血族全員に死罪が言い渡される可能性だつてある。王の前での誓いとはそれ程に重いものなのだ。

会場のざわめきが消えぬ中、私は光の王の足元に跪き、光の騎士に任命されるアクイムをただ睨んだ。

暫くの間、頬を伝う涙が止まることはなかった。



第一話 どうも大魔王です

どうも大魔王です。シャバの皆さんは最近いかがお過ごしでしょうか？

私はその昔、あと一步で世界征服というところまで行つたにも拘らず、超可愛がつていた弟子達に裏切られて、最近までメツチャ悔しい思いで封印されていました（笑）。

この三百年の間、封印を破ろうと昼寝の合間に超頑張ったのですが、私の弟子はそれぞれの属性を極めた王だけあつて、私が何をしても封印はうんとすんとも言ってくれませんか（シクシク、シクシク）。

この分だと外に出るまでにあと何百年掛かるのだらうかと、流石の私もちよつぱりへこみました。と、そんな時です。この大魔王にまさかのビッグチャンスが到来したのは。

チャンスを持つてきてくれたのは、アクイム君というちよつとお馬鹿な人間さんです。どうもアクイム君は先程対決した人間さんとその人間の彼女？ さんに思うところがあつたらしく、大魔王である私の力を借りようと生け贄やらなんやら、とにかく色々やつてくれました。パチパチパチ（心の中で惜しみのない称賛を送る私）。

勿論王達の封印は本来ならアクイム君みたいな小悪党さんなんかが逆立ちしたところでどうこうできるものではありません。

しかし何ともラッキーなことにアクイム君は大臣の息子、つまりお金持ちのお坊ちゃまだつたのです。お陰で儀式の内容はともかくとして、そこで使われた触媒だけは紛うことなき一級品ばかり

でした。それらを利用して大魔王である私が超頑張った結果、こうして念願の復活を果たすことができたのです。イエーイ（心の中で飛び跳ねる私）。

さて、では自由になれたことですし、さっそくお馬鹿な弟子達にお仕置きをしに行きますかね。封印から出た直後の私は呑気にそんなことを考えていました。

勿論直ぐに自分の身体の異常に気付きましたとも。そう、封印から出られた喜びですっかり忘れていたのですが、封印が出る際、私は必要に迫られて自分の身体をメチャクチャ削ったのです。それはもう、これでもかと削ったのです。何せ封印を破れたとは言え、開いたのはほんの小さな隙間に過ぎず、そこを通るにはどうしても己の身体を極限まで小さくする必要があったのです。

幸い私は肉体をバラバラにされても再生できる力を持っています。ですが長年封印されて弱っていたのがマズかったのか、予想以上に消耗してしまいました。今の私の状態を人間で喩えるなら目玉一つになって行動しているようなものです。

つまりは瀕死です。ぶっちゃけ死んでしまいそうです。

こんな状態で弟子達に復活がばれたら、さあ大変。今度こそ殺されてしまうでしょう。だからそうなる前にご飯を沢山食べて、元の向かうところ敵なしだった無敵で素敵な大魔王^{わたし}に戻る必要がありますのです。

ちなみに私の為に色々と頑張ってくれたアクイム君は苦しまないよう、頭から丸呑みにしてあげました。本来なら空腹時の貴重なご飯であるアクイム君はもつとじつくり味わって喰べたいところでしたが、大魔王たるもの恩には恩で報いるべきでしょう。

彼はそのつまらない命の最後を安息で終えたばかりではなく、その命を使って大魔王復活という

何者にも成し遂げられなかった偉業を成したのです。これだけの事をやり遂げたのであれば彼もきつと満足の内に死ねたに違いありません。やったねアクイム君。メツチャクチャ格好いいよアクイム君。パチパチパチパチ（惜しみのない拍手を送る私）。

さて、では勇敢で素敵だったアクイム君のことはこれくらいにしておいて、今を生きるナウイ大魔王である私は未来に目を向けます。

幸い光の騎士に任命されたお陰で手元に聖剣が戻ってきました。これでこれから先、力が戻っても、この剣の魔力を上手く使えば私の気配を誤魔化すことができるでしょう。

まあ、この剣を受け取る為に私を封印してくれやりました弟子の一人であり、光の王でもあるフローリアの前に出る必要があったので、ばれるのではないかとヒヤヒヤしましたが、所詮一人では私の足下にも遠く及ばない未熟者。私が私であることに気付くことなく、その昔私が作ってあげた剣を私に返してくれました。

まったく、三百年経つても進歩のない。ああ、いや、昔より遥かに牝っぽくはなっていましたね。思い出すのは波打つような金色の髪と満月を思わせる黄金の瞳。白いドレスで着飾った姿は私のもとにいた時のボーイッシュな雰囲気のある子とは似ても似つかないものでした。

この私を裏切ったお馬鹿なあの子達にどのような復讐をするか考えていたのですが、せっかくあんな立派な牝になつているのですから、ここは一つ、本人のお望み通り牝として二度と私に逆らえないよう調教してあげることにしましょうか。

「ふふ。それはいい。とても、とても楽しそうですね」

いずれ来るその時を想っていると、部屋の間がひかえめにノックされました。

ああ、ようやく待ちに待ったご飯がきましたか。

私はワクワクを悟られないよう気を付けながら、大恩人アクイム君の口調を真似て命じます。

「入れ」

「失礼します」

芯のある声音。腰まで伸びた黒髪は触れれば切れる刀剣のように美しく、黒色の瞳はいかなる困難にも屈さない意志の強さを表しています。入ってきたのは赤と黒のコントラストが素敵な軍服を見事に着こなした、凛とした女性でした。

「よくきたじゃねーか、エラーナ」

「……………」

おやおや。せっかくアクイム君が満面の笑みで迎え入れたというのに、彼女、エラーナさんからは何の反応もありません。アクイム君の記憶の中にある普段の凛々しい彼女ならば、アクイム君のようなおグスさんが近づく^{あらわ}と嫌悪と敵意を露にするはずなのですが、己の境遇を理解している彼女は普段の覇気をすっかりとなくしているご様子。

正直、これはよくない兆候ですね。

と言うのも何を隠そう、私は人の憎悪とか恨みとかいった感情が大好物なのです。なのに彼女は現状に絶望するだけで私（というかアクイム君）を憎む気持ちを弱らせてしまっています。

このままでは復活して最初の豪華ディナーが味気のない冷飯になってしまいます。なのでここは私が美味しいご飯にありつく為、今は亡きアクイム君に超頑張ってもらうしかありませんね。

私はアクイム君の記憶を探ると、アクイム君らしい下卑た笑みを浮かべました。

「くつくつく。いい様さまだなエラーナ。ちなみにテメー、今からどうなるか分かってんだよな？」

ビクリ、とエラーナさんの肩が大きく上下します。しかしそれでもエラーナさんは口を開くことなく、ただアクイム君から顔を背けました。

まったく、エラーナさんったら。何故そんなに弱気なんですか？ 自分より弱くて性格も最低なアクイム君が貴女を犯そうとしているんですよ？ 殺して逃げてやろうとか思わないんですかね。人間やればできるって誰か偉い人が言っていましたよ？ 頑張ってエラーナさん。超頑張って。

私はアクイム君の中からエラーナさんに向けて声援を飛ばします。しかし悲しいかな。祈りとは時に無力なものです。エラーナさんはいつまで経っても無言を貫いたままで、その態度からはこれから起こる運命に憤りながらも、どこか受け入れてしまった者特有の達観が垣間見えました。

うーん。これは本当によくないですね。もつと煽らねば（使命感）。

「ハッ！ だんまりか？ それはつまり、付き人としての使命を放棄するってことではないのかよ？」

「なっ!! ち、違う。早とちりをするな。私はちゃんと私に課せられた使命を果たす」

「どうかな？ まあ、テメーがダメなら妹にやらせるだけだな」

「ティアラには手を出すな！」

エラーナさんの全身から魔力が吹き出し、それが炎となって御飯エライナさんを綺麗に彩ります。

よしよし。その意気ですよー。やっぱ人間元気が一番。何せ元気がなければ人を憎めませんからね。

アクイム君は炎を纏まとうエラーナさんを前に、いかにも小者っぽくビビります。

「ひ、ひい!! お、おい！ な、なんだテメー、その態度はよお!! テメー誰に向かって口利いて

やがる？ お、俺様は光の騎士だぞ。今すぐ王に言いつけるぞ！ 反逆だぞ！ い、いいのかよとおお!!」

屍餅をつくアクイム君。さあ隙だらけですよ？ これで憎しみをもつてアクイム君を殺しにきてもよし。逆に堪えてその憎しみを内面で激しく燃やしてもよし。どちらにせよ美味しい憎悪^{ごはん}が頂けそうですね。

ちなみにエラーナさんは後者を選択したようです。

「くっ。す、すみませんでした。アクイム……様」

頭を下げるエラーナさん。項^{うなだ}垂れるその顔は前髪で隠れて見えませんが、抑えきれない憎しみに固めた拳がプルプルと震えちゃってます。

いいですよー。いいですよー。その調子です。その調子で私……というかアクイム君を憎んでくださいね。

「クソが！ ビビらせやがって、クソが！」

アクイム君はこれぞ小者、と言わんばかりに喚^{わめ}き散らしながら立ち上がります。それを見るエラーナさんの軽蔑しきつたあの目ときたら。いいですよー。もつともつとアクイム君を憎んでくださいねー。殺してしまおうかと思うほど憎んでくださいねー。

それら全部、私が残らず喰べてあげますから。

「もう許さねえ。さつさと始めるぞ。オラ、服を脱げよ！」

ベッドに腰を下ろしたアクイム君が傲慢に命じれば、エラーナさんは決して短くない逡巡^{しゆんじゆん}の後、震える手で軍服を脱ぎ始めました。

何の飾り気もない質素な黒い下着が現れ、うつすらと割れた腹筋がアクイム君の獣欲を刺激します。

惚れた女性の脱衣シーン。アクイム君が夢にまで見た光景の一つなんですが、ある意味それは私も同じです。

三百年ぶりのちゃんとした食事。ああ、涎が止まりません。

さて、ではエラーナさん、覚悟はいいですか？

夜は長いですよ。どうか思う存分、嫌いな男の腕の中で己の運命とアクイム君になりました大魔王^{わたし}を憎んでくださいね。

第二話 怒り

ついにこの時がきてしまった。予想通り、アクイムは光の騎士となると直ぐに付き人である私に女としての奉仕を命令してきた。これに抗う術は^{すべ}ない。アクイムとの勝負に負けたアトムは私の所に来ると土下座をし、自分と逃げようと言ってくれたが、そういう訳にもいかないのだ。

何故ならば、最早これは私一人の問題ではないのだから。光の騎士とその付き人には巨大な権力が与えられる代わりに義務を果たさなかった時の処罰も容赦がない。

仕方ない。そう、これは仕方ないことなのだ。

アクイムの部屋の前で何度自分にそう言い聞かせただろうか？ 流石にこれ以上は無意味だ。

私は深く息を吸うと、余計な感情と共に迷いを全て吐き出した。そして意を決すると恐らくは人生で最悪の屈辱が待っているであろう部屋のドアをノックする。

コン、コン、コン。

「入れ」

ドア越しに聞くだけで不快になる声。それに逃げ出すならこれが最後のチャンスだと思った。同時に未だにこんな考えが浮かぶ自分自身に自嘲する。

「逃げる？ 何を馬鹿な」

そう、馬鹿なことだ。もう逃げ道などどこにもありはしない。別に選択肢がなかった訳じゃない。これが自分で選んだ道なのだ。

「失礼します」

そうして私は今日から己の主となる男の部屋へと足を踏み入れた。

「よくきたじゃねーか、エラーナ」

持ち主の自己顕示欲をこれでもかと表したかのような無駄に贅^{ぜい}を凝らした部屋。アクイムはそんな部屋の中央で勝ち誇った笑みを浮かべていた。

絶世と噂される母親の血を色濃く受け継いでいるお陰か、容姿だけを見るならばアクイムは悪くない。いやむしろ上等な部類に入るのだろう。だが人を見下しきった下卑た笑みや、大臣の息子であることを鼻に掛ける言動が全てを台無しにするのだ。

「服を脱げ」

最初のやり取りで危うく感情が爆発しかけた私だったが、家族の為に怒りを抑えると血を吐くような思いでアクイムに謝罪した。するとアクイムは先程までの無様^{ぶざま}な態度から一転して傲慢な態度で私に裸体を晒すよう命令してきたのだ。

最早逆らうことはできない。私はせめてもの抵抗として着てきた軍服を自身の手で脱ぎ捨てていく。しかし不覚にも下着姿を晒したところで躊躇^{ちゅうちよ}が生まれてしまった。

「どうした？ 俺様は脱げと言ったぞ」

脱衣の手を止めた私を可笑しそうに眺めるアクイム。あの優越感に満ちた顔ときたら。私は再び怒りで我を忘れそうになった。

異性には見せたことのないありのままの私。それを最初に見せるのがよりにもよってこの男になるなんて。

強すぎる怒りと羞恥に目眩^{めまい}を覚えながらも、私は止まっていた手を動かした。

「……脱ぎました」

こうなればせめて堂々としていよう。裸が見たいのなら見せてやる。その代わり誰が貴様などに弱いところを見せるものか。

そんな決意はしかし、最後の下着を脱ぎ捨てると共に呆気なく霧散した。

普段裸になることのない場所で、絶対に裸を見せたくない相手に肌を晒すことが、こんなにも心細いことだったなんて……。

私は胸と陰部を手で隠すと熱を帯びた顔をアクイムから背けた。

アクイムの嫌らしい視線が全身を這^はうのを感じる。私は目を瞑ると早くこの悪夢が終わってくれと、ただ祈った。

「へっへっへ。想像してた通りのいい身体だな。おし、その場で寝ころがって股を開けや」

「……………は？」

聞き間違いだろうか？ アクイムのあんまりな言葉に私は思わず閉じていた目を見開いた。

だがアクイムは啞然とする私をニヤニヤといやらしく見つめるだけで、どれだけ待っても他には何も言おうとはしない。それで私は聞き間違いでも冗談を言われた訳でもないと理解した。

「き、貴様！」

羞恥心が吹き飛び、胸の内からマグマのような怒りが込み上げてくる。脳裏に先程見たアクイムの無様な姿が浮かんだ。

このままコイツを殺してしまおうか？ かなり真剣に悩んだが、それを実行した場合の代償があ

まりに大きすぎた。

いや、あるいは罰を受けるのが自分一人で済むのなら迷うことはなかったかもしれない。しかし父や母、何よりも可愛い妹を私のせいで死罪になんてできるはずがなかった。

「おいおい。テメーは俺の付き人だろうが、何を迷ってんだ？ あっ!!」

我慢。我慢だ。私は目尻に浮かびそうになる涙を必死に堪えようと、その場で横になった。そして――言われた通りに股を開いた。

「おおっ!!」

アクイムの顔が私の最も弱い所に近づいてくる。クソ！ クソ！ ……は、恥ずかしい!!

ああ、何てことなの!! 少し前までアトム以外には決して見せることがないだろうと思っていた女性器を、よりにもよってあのアクイムに自分から見せてるなんて。誰にも触らせたことのない場所に掛かるアクイムの鼻息が気持ち悪い。

何よりもアクイムのあの下卑た顔。……これが終わったら死んでしまおうか？ そんな誘惑が浮かんでは消えていく。

「けっけっけ。いい格好だな、エラッナ」

アクイムは思う存分私の陰部を視姦すると立ち上がり、女の最も大切な陰部こころを足で踏みつけた。

「ひゃ!! なっ？ く、んん!!」

敏感な場所に走る初めての刺激に思わず声が出る。

「へへ。そういえば昔、テメーにこうして踏まれたことがあったよな？」

アクイムがあまりにもしつこく私や妹に言い寄ってくるので、堪忍袋の尾が切れた私はアクイム

を殴り付けその頭を踏んづけた。實力差を身体に叩き込んでやればもう安易なことではしてこないだろう。そう思つての対応だったのだが、まさかこんな事になるなんて。あの時は想像もできなかったし、今もこれが現実とは認めたくなかった。

「ああ、そうだ。踏まれたのはここじゃなかったよな？ あゝ、思い出せねー。どこだったかな？」
陰部を蹂躪したアクイムの足が私の身体を上ってくる。おぞましい感覚。私は拳を握りしめた。

「ここだったかな？」

「ひっ!!」

女性の象徴である乳房をいように踏みつけられる。先っぽの部分を胸の中に押し込まんばかりに執拗に踏まれた。

グリグリ、グリグリ。

「……ッ!」

「弾力のあるいい胸だが、ここじゃねーな」

アクイムの足が乳房を通りすぎて更に上へと移動する。そして私の頬を踏みつけると――

「あゝ。ここだったか？」

「フガア？ ぐっ！ んんっ!!」

口の中に親指を突っ込んできた。突然のことに目を見開くことしかできない私に、アクイムは下卑た笑みを浮かべて命令してくる。

「舐めろ」

ちくしょう。ちくしょう。

私は言われるままにアクイムの足の指を舐めた。

吐き気がする。吐き気がする。

いいところのお坊っちゃらしく色々と気を付けているのか、驚くほど何の匂いもしないのが唯一の救いだ。そうでなければとくに胃の中のを全部ぶちまけていただろう。

「ふっ!?　ぐうう、んんっ!!」

口の中でアクイムの親指が執拗に舌に絡んでくる。私を見下ろすアクイムのあの笑み。さぞかし今の私は間拔けな顔をしているのだろう。そう思うと涙が頬を伝った。

「オラ、どうした?　もっと舌を動かせよ」

「ぐううう……レ、ロ。レロ。レロ、レロ。レ……」

スポン!　と唐突に口から出ていくアクイムの指。あまりの気持ち悪さに眩暈がする。

「オゲッ。ゴホゴホ。ゴホゴホ」

「ケッ!　大袈裟な反応しやがって。だがまあ、そろそろいいか。おい、身体を起こせや」

「ハアハア。ウゲ!　ゴホゴホ」

付き人の候補として厳しい訓練を積んできた私だ。数キロ走ったとしても呼吸を乱さない自信があるが、精神的なものが原因なのか、乱れた呼吸が中々戻ってくれない。

アクイムは荒い呼吸を繰り返す私を呆れたように見下ろすと、命令を繰り返した。

「おいおい。聞いてたか?　俺様は身体を起こせと言ったぞ」

本当に何て不快な声なのだろうか。その声を聞くだけで目の前が怒りでチカチカする。私はアクイムに襲い掛かりそうになる自分を必死に自制しながら立ち上がった。

「おい、コラ。誰が立っていいと言った？ 俺様は身体を起こせと言っただけだぞ」

「え？」

「膝立ちだ。早くしろ」

何がしたいのかは分からないが、逆らっても無駄だろう。私は言われた通りアクイムの前で膝立ちをする。

するとアクイムは突然ズボンを下げた。それも下着ごとだ。

眼前に晒された男性器に私は危うく悲鳴を上げかけた。

血管が焔々しく浮かび上がった、人の手首程もありそうな肉棒がヘソを越えて反り返っている。

男性のアソコが興奮することによって大きくなることは知っていたが、ここまで大きくなるものなのか!?

「そ、それをどうしろと？」

「口を開けろ」

その一言で私はアクイムが何をしたいのか理解する。男性器を女に舐めさせたい男は多いと聞く。確かフェラチオとか言っただろうか？ だが本当にあんなに大きなモノが口に入るのだろうか？

私は不安と怒りを覚えながらも、アクイムの指示通りに口を開けた。

「もっと大きく開けろ」

クソ！ ただでさえ大口を開けた姿というのはみつともないのに、それを何でコイツなんかに。

……いや、我慢。我慢だ。

また涙が溢れそうになったが、アクイムに泣き顔を見せたくなくて、必死に堪えた。

「よし。いいだろ」

アクイムは大口を開けた私を見て満足げに頷く。しかしどういう訳か何もしてこない。少し距離を開けたまま、反り返った男性器を私の方に向けてそれ以上動かないのだ。

男性器を前に大口を開けたまま膝立ち、そんな酷く間拔けな時間が続く。やがて――

「ちゃんと飲めよ」

ようやく発せられたアクイムのその言葉に、私は途轍もなく嫌な予感を覚えた。咄嗟とっさに口を閉じようとしたのだが、しかしその決断はあまりに遅すぎた。

ブシャアアアアアアアアアアア!! 男性器より放たれた小水が、私の顔と言わず全身に降り注ぐ。

「い、いやああああ!!」

私は咄嗟に顔を腕で守った。だが、アクイムのクソヤロウが放つ小水は止まらない。生温かなそれは私の顔を、髪を、乳房を、陰部を犯していく。

「あははは。いい様だな、オイ」

哄笑いっしょうが聞こえる。哄笑が聞こえる。哄笑が聞こえる。

最低最悪のクソヤロウが笑っている。

頭の中で何かが弾け、視界が真っ赤に染まった。

「貴様ああああ!!」

私は怒りのままにアクイムへと殴り掛かった。

第三話 いただきます

「貴様ああああ!!」

アクイム君に小便を浴びせられたエラーナさんが怒りに目を吊り上げて殴り掛かってきます。

屈辱と怒りにその美貌を歪めながらも、それでも彼女は美しかった。

野生動物を思わせるしなやかで無駄のない肢体。まるで濡れているかのように艶やかな黒髪。何よりも内面に秘められた意志の強さを表した力強い黒色の瞳が、彼女を凡百の牝とは違う別格の存在へと押し上げています。

流石は百年に一人の天才と呼ばれるだけがありますね。アクイム君が彼女に執着したのも頷ける話です。

全身から吹き出す炎は人間など簡単に焼き殺せるだけの憎悪ねつりようを秘めており、黒かった彼女の髪や瞳はあまりにも強い彼女自身の魔力で深紅に染まっていきます。

だから私はもう一度思いました。美しいと。

そして何よりも感動しました。何て美味しそうなのだろうと。

「キャハ」

思わず人間の声帯では発声できない類いの声を出してしまいましたが、怒りに狂ったエラーナさんは気付かなかったようなのでセーフとしましょう。

アクイム君はエラーナさんの人間にしてはそこそ速い拳を優しくいなすと、そのまま互いの位

置を交換するように移動。エラーナさんの背中を軽く押してベッドに押し倒します。

「がっ!? なっ!!」

エラーナさんはアクイム君の動きがまったく見えなかったようで、何故自分がベッドに、それもお尻をアクイム君に突き出すような形で倒れているのか理解できずに戸惑っています。

アクイム君はそんな可愛らしい反応を見せるエラーナさんのお尻をガシリと掴みました。そして少し腰を突き出してエラーナさんの陰毛を男性器で撫でます。

「な!? や、やめろ!! 殺す。挿れたら殺すぞ!!」

「へっ。何だテメー、まさかビビッてんのか?」

「だ、誰が貴様の貧相なモノ……ひっ!? な、何でさっきより大きくなってるんだ!」

後背位の体勢で首だけ振り返ったエラーナさんの顔が、アクイム君のビッグなモノを見るなり一瞬で青ざめます。

うーん。やはりコレ、大きすぎましたかね?

女性を色んな意味で喰べる際に大恩あるアクイム君の男性器を粗チンと罵られては大魔王の名折れと思い、親切心でサイズを水増ししておいたのですが、どうやらこの親切、牝の身体には全然優しくなかったようですね。

まあ、人間の牝がどうなろうが知ったことではないのですが、エラーナさんの反応を見るに若干の不都合は生じます。

何故なら私は憎悪を喰べたい訳であって、恐怖はあまり興味がないのです。いえ、喰べられない訳ではないのですが、何かあのベチョベチョした感じが合わないんですよ。

だからここは一つ、再び大恩人アクイム君の力を借りることにしましょうか。

私はアクイム君ならこんな時どういう行動を取るのかをアクイム君の記憶から考え、そして実行に移します。

「笑えるぜ。誰もが憧れの視線を向けるあの天才エラーナ様が、チンポが恐くて生娘のようにビビッてやがる。それともまさかテメー、処女なのか？ てつきりアトムのの奴とよろしくヤッてんのかと思つてたんだが、どうした？ あいつの小せえナニじやあテメーの処女膜には届かなかったか？」
アクイム君はエラーナさんのお尻に大魔王わたいし特性のビッグペニスをベシベシと叩きつけました。そりやもう、何度も何度も叩きつけました。

ベシベシ。ベシベシ。

ベシベシ。ベシベシ。

うーん。意外と楽しいですね、これ。

「ふ、巫山ふざけ戯るなああああ！」

おおっ!? やりましたよ。アクイム君のビッグペニスに怯んでいたエラーナさんの怒りが再燃しました。スキンシップとはかくも大事なものですね（感動）。

「貴様ごときが、貴様ごときがアトムを語るな！」

「おいおい。そんなに尻を動かして、何だ？ 誘つてんのか？ この淫売が」

エラーナさんのお尻の穴に指を突っ込むアクイム君。

「ひゃあああ!? き、きさ……ひゃ!? くつ。ア、アクイムウウウ。そ、そんな所に指を入れる……きや!? ク、クソ。な、何で、何で身体が動かないんだ？」

それはですね、エラーナさん。アクイム君が魔力でエラーナさんの身体を押さえつけているからですよ。

「魔術ではなく純粋な魔力で人を動けないようにするには三倍以上の魔力差を必要とするのですが、アクイム君とエラーナさんの魔力差は余裕で十倍以上あるので、簡単に押さえ込めるのです。」

「はは。尻を掘られて喜んでやがる」

「喜んでなどいない！ 適当なことを抜かすな!!」

エラーナさんの全身から炎が吹き出し、アクイム君の衣服を燃やし尽くします。

「おいおい。大胆な脱がし方をしやがる。何だ？ そんなに早く俺様とやりたかったのか？」

「なっ!? 今のを受けて無傷だと？ き、貴様は一体!？」

エラーナさんの炎をまともに浴びても火傷一つ負わないアクイム君。そんなアクイム君の前にエラーナさんの心に怒り以外の感情が発生します。つて、ストロープ！ いけません。いけません。せつかくいい感じだった憎しみが消えてしまつては元も子もありません。

私はエラーナさんが余計なことを考えられないよう、さっさと犯してしまうことにしました。

「さあ、覚悟はいいか？ 記念すべき俺様との初セックスの瞬間だぜ」

「ひっ!？」

アクイム君はこれ見よがしにビッグペニスをエラーナさんの女性器へと擦り付けます。

「や、やめろ！ 本当に、本当に殺すぞ!!」

奪われることへの恐怖。蹂躪されることへの怒り。何よりもアクイム君に向けるその憎悪。ああ。いい、いいですよ！ たった一匹の牝を相手にこんなに興奮したのは久しぶりです。やは

り空腹は食事における最高のスパイスですね。

私の喜びに反応してアクイム君の男性器が更に大きくなります。

そのサイズときたら。あーあ、これはあれですね。エラーナさんにとって色んな意味で忘れられない処女喪失になりそうですね。

アクイム君はビッグペニスをエラーナさんの女性器、その入り口へピッタリと合わせました。

「行くぜ」

「や、やめろおおおお!!」

エラーナさんの全身から一際強い炎が吹き上がります。それと同時にアクイム君は大きく腰を突き出しました。

ズドン。ブチブチ。ツー。

「かつ!! あ??? あ、あ、あ、ああっ!!」

やはりサイズが大きすぎましたかね? それとも単純に処女を喪失したのがショックだったのでしょうか? エラーナさんは大きく目と口を開けたまま、呆けた様子で『あ』を繰り返して発声します。

そんなエラーナさんの女性器からは少くない量の血が流れています。思った通り、かなり裂けてしまったようですね。アクイム君は新鮮で汚らしいそれを指で掬って一舐めすると、一度大きく腰を引きました。

「ひうう!!」

突然の動きにエラーナさんの身体がビクリと震えますが、アクイム君は構わず今度は大きく腰を

突き出します。

「ぐうう!!」

エラーナさんは血が出る程に唇を噛み締めて痛みに耐えております。ふー、ふー。と肩を揺らす荒い呼吸がとつてもセクシーですね。それをオカズにアクイム君の腰がリズムよく動き出します。

パン、パン。パン、パン。

「いつ……たああああああい!? 痛い! 痛い! いた……クソ! クソオオオオ!! ア、アクイムウウウ!!」

アクイム君のビッグペニスに怯んだのは最初だけ、エラーナさんは真っ赤に燃える瞳でアクイム君を睨み付けます。

「へへ。そうこなくっちゃな」

エラーナさんの素晴らしい反応に負けじと、アクイム君の腰の動きも激しさを増します。

パンパンパン! パンパンパン!

「ぐうう!! ハアハア……クソ! クソ! こんなもの、こんなもののおお!!」

アクイム君に背後から獣のように犯されるエラーナさん。大嫌いなアクイム君に悲鳴を聞かれるのがよほど嫌だったのか、彼女はベッドのシーツを唾えると顔を伏せました。

「んく!! ん、んんん!!」

よしよし、いい感じですね。段々と膣内^{なか}が滑らかになってきましたよ。

さて、私も別に性行為を楽しむめな訳ではないのですが、このままエラーナさんの体力を無駄に削っては健全な憎しみを生み出す際の支障になるかもしれません。ですので、ここいらで待望の食

事を取ることにしましょう。

アクイム君が余裕のない切羽詰まった声を出します。

「ぐうおお！ 出る！ 出るぞ!!」

「え？」

何をされるか悟ったエラーナさんのお口からシートが取れます。次いで慌てて立ち上がろうとしますが、エラーナさんは全身を縛るアクイム君の魔力を振り解くことができません。

「ま、待て！ 膣内は駄目だ。膣内だけはやめろ!!」

「やめろだあ!! テメー誰に向かって命令してんだ？ あっ!!」

パアン、パアン。パアン、パアン。

「はう!? やめ、あ、ああっ!! ク、クソ。どうしたら、どうしたらやめてくれるんだ?」

「決まってるだろうが。お願いするんだよ、お願い」

「ふっ、くうう!! ハアハア……お、お願いだと!? 私が……んっ、き、貴様に?」

エラーナさんは犯されていることはまた別に、心底嫌そうな顔をします。

ふーむ。ここまでされて尚、お願い一つするのが嫌とは。本当にアクイム君は嫌われていますね。その天性の嫌われ者ぶり。まったくもって惜しい人を亡くしたものです（涙）。

こうなったら仕方ありません。せめて私がアクイム君の分までエラーナさんの身体を楽しんであげましょう。

「はは。別にお願いたくねーなら無理にしなくていいんだぜ。そんなに俺様の精子が欲しいなら欲しいって、最初から言えよな」

パンパンパン！　パンパンパン！

「くうううう!?　ひゃあ!?　ああん!!　く、うう……ハアハア……や、やめてください。お、お願い……んっ!?　……し、します」

おやおや、エラーナさんったら。アクイム君のような小悪党さんに懇願なんて、よほど子^な宮^かに出されるのが嫌なんですね。

でも大丈夫ですよ。そんな弱気なエラーナさんにアクイム君から素敵なプレゼントがあります。だから早く気付いてくださいね。貴女がアクイム君に向けるのは懇願なんかではありません。憎しみです。それを間違えたら、めっですよ、めっ。

「よく言えたな。偉いぞ、エラーナ」

「くううう!?　だ、だつたら……ふっ、ハアハア……さつさと、ぬ、抜け」

「は？　やだよバ——カ」

「なっ!?　き、貴様。約束が、約束が違うぞ!」

「馬鹿かテメー。誰が自分の所有物なんかと約束するかよ。テメーは自分のマ○コに突つ込む玩具にいちいちお伺いでも立てんのか？　あっ!」

バチンバチンバチン!!　バチンバチンバチン!!

「ひゃ!?　はや……ああんっ!?　く、う、うう……ハアハア……や、やめ……ち、違う。ひゃ!?　わ、私は、私はお前の所有物なんかじゃない。放せ……ハアハア……放せええええ!!」

「テメーは俺様の所有物なんだよおおおお!」

アクイム君は必死に中出しから逃れようと暴れ回るエラーナさんのお尻を強く掴みました。そし



て――

ドピユ！ ドピユウウウ！！

エラーナさんの子宮なかに向かつて、これでもかと精を放ちます。

「ひいひいひい？ これって？ これって？ 嘘っ!! 嘘よおおおお!!」

エラーナさんはいやいやをする子供のよう何度でも何度も首を振ります。

「何が嘘なんだ？ テメーは俺様に種付けされてんだよ。アトムではなく、この俺様にな。テメーの子宮を最初に征服したのはこの俺様。たとえ魔術で避妊してもその事実是不変わらねー。ひやつはっは。マジでいい気味だぜ。オラッ！ 最後の一滴までテメーの子宮に注いでやるからありがたく飲み干せや、この雌豚があああ!!」

「ア、アクイムウウウウ!! ……き、貴様、貴様あああ!! 許さない。絶対に許さない。殺す！ 貴様を殺してやる!!」

おおっ!! ついにきましたね。ここです。憎い男に犯され、それでも折れることなく更なる憎しみを生成するこの瞬間。この瞬間を待っていたのです。

「んじゃ、いっただつきまゝす」

私はエラーナさんが放つ憎悪にかぶりつきました。

パクリ。

「ひやつ!! ハアハア……殺す……ハアハア……殺してやるううう!!」

ああ。魂の隅々にまで広がるこの熱くて濃厚な力あじ。これです。私はこれ waited いたのです。

「うめえ!!」

感激にアクイム君の腰が激しさを増します。

パンパンパン！　パンパンパン！

「ぐ、あ、ああつ!?　ク、クソオオオオ!!　放せ。はな……ひう!?　な、何?」

手負いの獣のように怒り狂っていたエラーナさんですが、私に憎しみを残らず喰べられたことでその身体に、とある変化が現れます。

「あ、ああ!?　嘘!?　嘘!?　これって。これってまさか!?　どうして?　どうしてえええ!」

突然エラーナさんは先程までの暴れっぷりが嘘のように大人しくなりました。その原因は――

「ああん♥　ひや、ハアハア……ん♥　ま、待って!　な、なにか……ひや♥　つく、うう♥　お、おかしいの」

アクイム君への憎しみが消えたことで、怒りで抑えていた快楽が肉体を支配し始めているのです。

「何だテメー?　まさか感じてんのか?」

アクイム君はすかさずそんなエラーナさんの変化を揶揄すると同時に、体位を後背位から正常位に変更します。憎悪という最高の反発心を失ったエラーナさんはアクイム君にされるがままです。

「はは。これは傑作だ。何だそのだらしねー顔は?　中出しされて牝としての本能にでも目覚めたかよ?」

「う、嘘よ。こんなのう……そ、ひっ!?　あ、ひやああああ!」

プシャー!!　と、エラーナさんの女性器から大量の膣液が放たれ、うつすらと割れた腹筋がとつてもセクシーな上半身が、まな板の上で跳ね回るお魚さんのように何度も何度も暴れ回ります。

「ひぎゅうううう♥　ひぎゅうううう♥」

「おいおい。何、潮吹いてんだ？ ベッドがビショビショだぜ？」

「ひう♥　ち、違う！　違う〜!!」

「顔を隠すんじゃねえ」

アクイム君は牝顔を隠そうとするエラーナさんの腕を強引にどけると、そのままエラーナさんの唇を奪いました。

「ん!?　んん〜!?」

エラーナさんは咄嗟にアクイム君の舌を噛み切ろうとしますが、どんなに噛まれてもアクイム君にとってはそんなもの、程よい刺激でしかありません。

「クチャ、クチャ。クチャ、ク……プハア。へへ。最高だぜ。テメーの中はどこもかしこも最高だぜ」

「き、貴様……殺す。絶対殺してやるうう〜♥♥」

アクイム君の唾液でグチャグチャになったお口から恨み言を吐き出すエラーナさん。その身体からなくなったはずの憎悪が再び発生します。

よしよし。いい子ですよ。

感情というのは一度損失してしまうと、もう一度作り出すのにそれなりの時間を必要とするものですが、この短時間で再び憎しみを発生できたエラーナさんはとても優秀と言えるでしょう。

ではでは、そんな優秀なエラーナさんに感謝しつつ、もう一度ご飯を頂くとしますかね。

パクリ！

「はうううう♥　な、なんなの？　こ、この感じ？　こ、これは……ハアハア……な、なんなの

「おおおお!!」

プシャアアア。またもエラーナさんの身体が大きく跳ねます。ただし今回女性器から放たれたのは膣液ではありません。

「おいおい。エラーナ。気持ちよすぎたか？ お前、ションベン漏らしてるぜ」

「あ、ああ。嘘？ 嘘!! ひ、うう。やだ、こんなの……もう、やだああああ!!」

おお？ アクイム君なら絶対煽るだろうと思つて煽つてみたのですが、ついにあのエラーナさんが泣き崩れましたよ。紅く染まっていた髪や眼が黒に戻り、力強かった瞳が焦点の合わない虚ろなものへと変わっていきます。

アクイム君なら泣いて喜ぶ貴重なエラーナさん屈服シーンなのでしょうが、私としては拍子抜けですね。

まったくこの程度で音^ねを上げるなんて、所詮は人間ということですかね。

ご飯を提供できなくなった牝^めなんかに用はありません。アクイム君は泣き崩れるエラーナさんの膣^な内から男性器を引き抜きました。

と、そこでどこからともなく漂ってくる仄かな憎しみの香りに気が付きます。

まさか？ と思ひエラーナさんの顔を見れば、涙と涎でグシャグシャになっていた彼女の顔に力強さが戻っていました。

憎悪に歪んだ黒色の瞳がアクイム君を射ぬきます。そして――

「……絶対に、許さない」

それは何て食欲をそそる一言なのでしょう。アクイム君は自身の精液^ネでドロドロになっている

エラーナさんの膣^{なか}に再び男性器を突っ込みます。

「んっひゃああ〜♥♥」

なけなしの憎しみを振り絞ったエラーナさん。ですがそんな不屈の心とは裏腹に、私に感情を喰べられ弱りきった身体は男性器を突っ込まれただけであっさりと絶頂に達します。

「きひいいいい〜!!」

エラーナさんは舌を大きく出した無様な顔で何度も何度も潮を吹きます。

結局その夜は彼女の憎しみを五回以上喰べることに成功しました。美味しいご飯を提供してもらったお礼に、私はエラーナさんが完全に力尽きるまで、何度も何度もその身体にアクイム君の精を放ってあげました。

翌朝。ベッドに横たわる彼女はアクイム君の精液で全身真っ白で、その姿はまるでウエディングドレスを着た花嫁のようです（出しすぎましたかね?）。最早彼女の身体でアクイム君が触れていない所はないでしょう。

「ふふ。素敵な夜でしたよ、エラーナさん」

今回のお食事タイムは間違いなく、この三百年で最も充実した一日でしたね。

私はそんな素敵な一日をくれたエラーナさんに感謝の気持ちを込めて、アクイム君の精液でドロドロになっている可愛らしいお顔に、優しい口付けをプレゼントしました。

第四話 やっぱりクズでした

汚けがされた。

目が覚めて知らない部屋の天井を見上げながら最初に思ったことがそれだった。

アクイム。どうしようもなく卑怯でつまらない、取るに足らない男。そんな男に誰にも、アトムにも見せたことのない裸体を晒し、口に、膣に、果ては後ろの穴にまで汚ならしいものを挿れられ、そして浴びせられた。

震える身体を抱き締める。不思議と涙は出てこなかった。ただ酷く気怠い。何も考える気になれず、虚空を見続けるだけの無為な時間が過ぎていく。

どれだけそうしていただろうか？ 時間と共に身体を包んでいた気怠さは消えていき、覚醒した意識に引っ張られて脳が活発な活動を開始する。

下腹部に手を伸ばしてみた。アクイムの異常なまでの大きさを誇る男性器（比較対象を知っている訳ではないが、あれは絶対に異常だ）。それによって無理矢理裂かれた私の身体は、しかし思った程のダメージを受けてはいなかった。

「……治療されてる？」

人よりも強い魔力を持って生まれた私の自然治癒力は一般人とは比べようもない程に高い。しかし魔術を使った訳でもないのに、たった数時間でここまで綺麗に治るとは思えなかった。

では誰が治療したのだろうか？ アクイム？

「まさかな」

ふと思いついた考えに自嘲する。あの最低最悪の男が自分を殺そうとした女を治療するはずが

「あっ!!」

戦慄。私はベッドから飛び起きた。

「そうだ。私、私……何てことを」

怒りに任せてアクイムを殺そうとしてしまった。もしも、もしもそれをアクイムが上に報告していれば、私は光の騎士を私情で殺そうとした大罪人だ。いや、私だけの問題ではない。責任は家族にも及ぶだろう。

「父上。母上。ティアラ」

私はいても立つてもいられずに駆け出した。アクイムは私に執着しているから簡単には切り捨てられない、そんな樂觀はどこにもなかった。

アクイムが私に執着していたのはあくまでも私を抱く前の話だ。一度床を共にした後、急に男が態度を変えるのはよく聞く話だ。実際アクイムも自分になびかない女を様々な手段を使って抱いておきながら、事が終わった途端に今までの執着が嘘のように突き放すという前例を幾つも持っている。

昨日私は、そんなアクイムに犯された。もう私の身体でアクイムの指や舌が触れていない場所はないだろう。それで早くも飽きられたかどうかは分からないが、可能性がまったくない話ではなかった。

「お願い。無事でいて」

祈るような気持ちで部屋を飛び出した。無駄に大きな扉を開けるとシャンデリアを始めとした高級そうな家具が所狭しと並ぶリビングに出る。改めて思うが部屋のそこかしこに虚栄心が表れた、いかにもあの男が好みそうな空間だ。

そしてそんな部屋の中央、大人が五人は寝転がれそうなソファの上に奴はいた。

「おう。ようやく起きたか」

「アク……イム？」

昨日、私をこれでもかと犯した憎い男。視界に入ただけで一日を台無しにされたかのような不快感を常にもたらして来るその男は、しかし何故だろうか？　いつもとは少し違って見えた。

足を組み読書をしているその姿は今までにない気品のようなものを漂わせ、不相応な王冠を被っているかのように不釣り合いだった銀髪は、まるで正當な所有者のもとに戻ったかのように美しく輝いて見えた。

「どうした？」

ぼうぜん
突然とする私をアクイムが不思議そうに見てくる。その瞳に思わずドキリとした。そしてそんな自分が信じられなかった。アクイムの容姿だけを見て騒ぐ女達を内心で軽蔑していたというのに、これではまるで私がその軽蔑されるべき女ではないか。

まさか肌を重ねたからといって、それだけでアクイムへの気持ちが変わってしまったとでもいうのだろうか？　だからアクイムを妙に美化して見ている？　あのアクイムを!?

私は混乱のあまりアクイムから視線を逸らすと、自分でも聞いたことのない弱々しい声を出して

しまった。

「い、いえ。何でもない……です」

「そうか。なら仕事が溜まっている。さつさと手伝え」

「し、仕事？ お前がか？」

驚きに、ついいつもの口調が出てしまう。

しかしそれも無理のないことだろう。学生時代、大臣の息子であることを盾に殆どの授業に出なかったあのアクイムが、卒業後も親の脛を齧るだけでまったく働かないあのアクイムが、よりにもよって仕事だと？ おかしい。何かが絶対におかしかった。

アクイムは戸惑う私に頓着することなく気怠げな、それでいてどこか色気を感じさせる仕草でソファの前に置かれている机、その上の資料を指差した。

「一先ず現在光の騎士に与えられている仕事の中で、他の二人の騎士が手をつけてない奴をピックアップしておいた。目を通しておけ」

「あ、ああ。それよりも、その……」

どうする？ アクイムの異常さに面食らいはしたが、構わず昨日のことを謝るべきか？ それともこのままなあなあにしてしまうべきか？

アクイムに自ら進んで頭を下げるよりも、それは遥かに魅力的な考えだった。

……いや、あのアクイムのことだ。昨日の私の態度を気にしていないはずがない。ならばやはりここは先に謝っておくべきだ。たとえその件を逆手にアクイムが何を要求して来ようとも、どうせ既に汚された身だ。家族を守るなら何でもしてやる。

私はその場に両膝を付き、額を床に擦り付けた。

「アクイム様。昨日は申し訳ありませんでした」

必死であるのだから当たり前だが、すんなりアクイムを様付けで呼べたことが悲しい。このままきつとアクイムに犯されることにも慣れてしまうのだろう。そんな私を彼はどう思うだろうか？

脳裏に一瞬だけ、アトムが浮かんで消えた。

「昨日？ 俺を殺そうとした件のことなら三日前になるぞ」

「え？」

思いがけない言葉に思わず伏せていた顔を上げる。

「三日……ですか？」

壁に掛かっている金でできた趣味の悪い日付入り時計を確認する。確かに三日経っている。

初めての性行為で精神的に大きく疲弊した上、アクイムに夜通し犯されたことで体力も限界近くまで削られたのは覚えていたが、それでもまさか三日も寝込むことになるとは。

こんなことでアクイムが嘘をつく必要がないのは分かっているが、それでも体力に自信がある私としては、にわかには信じがたい話だった。

「つたく。付き人のくせに主に仕事をやらせて自分はお昼寝とか、いい身分だな、あつ!!」

「も、申し訳ありません」

アクイムの態度には腹が立つが、しかし言っていること自体は尤もだ。私はアクイムに対して初めて心から頭を下げた。

この時私はアクイムに下げた頭を踏まれるくらいの覚悟をしていたのだが、どうしたことが、ア

クイムからの折檻は幾ら待ってもやつては来なかった。

「まあいい。次からは氣を付けろ」

「は、はい。本当に……申し訳ありませんでした」

それだけ？　いつもなら鬼の首を取ったかのように一時間くらいは人の失敗をあげつらうあのアクイムが、それだけで人を許すのか？

ひよつとすれば私はまだ寝ているのかもしれない。一瞬本気でそんなことを考えた。

「光の騎士就任に関して必要な手続きは全て片付けておいた。あとは光の王国の有力者どもへの挨拶回りだけだな」

それこそ一番に片付けておくべきことだろうと思つたが、文句が言える立場ではないので黙つておく。しかしやはりアクイムの様子が変だ。同じ部屋にいただけで人を不快にさせるあの独特の雰囲気（みん）を微塵（みじん）も感じない。それどころか自然と人の視線を惹き付ける、一種のカリスマ染みたものさえ放つていような氣がする。

ひよつとして、本当にひよつとしてだが、光の騎士という責任ある立場に就いたことで、アクイムの中で何か変化が生じたのではないだろうか？

勿論それで今までアクイムが多くの女性に行つてきた非道が帳消しになる訳ではない。だがこんな奴でも生涯をかけて仕える主だ。いい方向に変わってくれることを願つても罰は当たらないだろう。

そしてもしも、もしも本当にアクイムが変わる努力をしているのなら、私も付き人としてそんなアクイムを認める努力をしなければならない。

それはとても難しいことだが、最低の男に仕え続けるよりは幾分マシな道ではないだろうか。

最早絶望と苦難しか残されていないと思っていた人生にほんの微かな光が差した気がして、私はそつと息を吐いた。

そんな私をアクイムがギョツとした顔で見詰めてくる。

「い、如何がいかされましたか？」

表情だけを見るならアクイムはまさにしまった、と言わんばかりの表情をしているが、一体何に對してそんな顔をしているのかさっぱり分からない。

アクイムは私の質問に答えることなく、ただ私の顔を真剣な表情で凝視する。それがどうしてもか物凄く怖かった。まるでどうやっても太刀打ちできない捕食者に体臭を間近で嗅がれているかのような、そんな不吉なイメージが浮かぶ程に。

「いや、少しもよおしてな。三日も寝ていた罰だ。エラーナ。便所になれ」

「は？ え？」

突然すぎて訳が分からない。呆然とする私に構わずアクイムはズボンを下げて、散々私を犯し抜いた男性器を取り出した。先日の責め苦を思い出し、情けなくも身体が震えてしまう。

「早く口を開ける」

その言葉でアクイムの意図を理解する。要するにこいつは私をもてあそびたいのだ。あるいはもう私が反抗できないと見越して屈辱を与えたいのか。どちらにしろそれは紛うことなきクズ野郎の行いだつた。

こんな男が、生涯の主。

アクイムに対して、何よりも自分自身に対して強い失望を覚える。やはりアクイムは何も変わってなどいなかったのだ。そしてそんなアクイムを普段と違う目で見ていた自分。無意識の内に自分の処女を奪った相手がただのクズではないかと思いたかったのかもしれないが、何にせよ情けない話だ。

「……………分かりました」

何かもう、どうでもいい。そんな気持ちが芽生えてくるが、だからといって昨日のようなあからさまな反抗をする訳にはいかない。

私は膝立ちになると大口を開けた間抜けな顔を晒す。アクイムは躊躇なく私の口内なかに汚ならしい男性器モを突っ込んできた。

「んんっ!？」

相変わらず大きい。でも気のせいだろうか？ 三日前よりは少しだけマシな気がする。

そう思っていると、アクイムの男性器が口の中で一回り大きくなった。

「んんっ!？」

突然の事態に思わず目を見開く私。そんな私にアクイムがいつもの下卑た笑みを浮かべた。

「悪くない便所だ。オラ！ 出すぞ。しっかり飲めよ雌豚」

アクイムの身体がブルリと震え、直後に放尿が開始される。

「んん!？ ゴクン。ゴクン」

ちくしょう。ちくしょう。今私はアクイムの汚らしいものを飲んでいる。どれだけ覚悟していても屈辱は屈辱だ。目も眩むような怒りが込み上げてきて、そして——ふと消えた。

「ん？ んん!!」

またこの感覚。何なのこれは？ 私の中から大切な何かが奪われていくかのような、この感覚は？

「まあ、こんなものか」

アクイムは満足げに咥くと私の口から乱暴に男性器を引き抜いた。

「ガハッ!? ゴホッ、ゴホッ!!」

小水で口元を汚し、無様にも四つん這いで荒い呼吸を繰り返す。アクイムはそんな私の髪を容赦なく掴んで顔を上げさせた。

「はっ！ 汚ねー面だ^つな。オラ、さっさとその薄汚い顔を洗ってこいやシヨンベン女が。付き人のテメーがそんなんだと俺様の品性まで疑われるだろうがよ」

そのあんまりな言葉に再び目も眩むような怒りが湧いて、やはり跡形もなく消えていく。おかしい。絶対にこれは異常だ。そう思いながらも憎悪^{いかり}を失った私はアクイムの言葉にただ頷くことしかできなかった。

「はい。ただちに……アクイム、様」

言葉を発する度に自分の中で大切な何かが死んでいくような気がする。せめて泣くまいと歯を食いしばる私を嘲笑うかのように一筋の涙が頬を伝った。

「くつくつく。さあ楽しい楽しい挨拶回りの時間だ。俺様を馬鹿にしやがった連中に、今の俺達の関係を見せつけてやろうじゃねーか」

その言葉で何故アクイムが挨拶回りを最後にしたのかを理解した。私がいなければ意味がない。つまりはそういうことなのだろう。

私は付き人の使命も忘れて目の前の最低最悪の男を睨む。

ああ。人を見下しきった何て嫌な目をしているのだろうか。何て不快な笑い声を上げるのだろうか。その下卑た態度の中には、私が最初アクイムに感じた気品のようなものはどこにも存在しなかった。

私は確信する。心を入れ替えるなんてとんでもない。こいつはやっぱり、ただのクズだ。

第五話 挨拶回り

ふー。危ないところでした。まさか普通に仕事をしただけで好意的な感情を向けられるとは思っていませんでした。

咄嗟の機転で男性器をエラーナさんの口にぶち込まなければ、危うくいい人認定されるところでしたね。

陵辱した女性からこうも簡単に感心されるなんて、そんなのは私のアクイム君ではありません。アクイム君はクズで下品な最低のお坊っちゃまだからこそ面白いのです。それなのにエラーナさんときたら……。まったく、早とちりには気を付けてほしいですね（プンブン）。

とは言え実はこの誤解、エラーナさんに限った話ではないんですね。

せっかくなりすまし生活。まずは真面目にお仕事をしてみようと思ったのですが、やってビックリ。ほんの少し仕事をしただけで皆が先程のエラーナさんのようにアクイム君が心を入れ替えたのではと、あらぬ誤解をし始めたのです。

勿論アクイム君の評価は最低最悪の四文字から成り立っていますので、数日真面目に働いたくらいで周囲の目は大きく変わりません。ですがこのまま働き続けられるかどうか、あるいは光の騎士として活動するのをやめちゃいますかね。前者だと何となく面白くなくて、後者だと別の問題が発生し

そうな気がします。

はあ、悩ましい。

まったく、ここまで大魔王を悩ませる一般人はアクイム君が初めてですよ。

エラーナさんのみならず私のバージンまでぶち破るなんて、流石は私の大恩人アクイム君です。そんな素敵な彼が何故お亡くなりになってしまったのか。まったく、世の中とは理不尽なことが溢れているものですね。シクシク（心の中で号泣する私）。

閑話休題。

さてさて、では一通りこの世界の有り触れた悲劇に涙したところで、アクイム君にバージンを奪われた者同士、仲良くエラーナさんと挨拶回りと洒落込みますかね。

ちなみにエラーナさんに宣言した通り、今回の挨拶回りの目的はアクイム君とエラーナさんの関係を周囲に見せつけることです。

何せエラーナさんは百年に一人の天才と言われる程の才女でルックスも抜群。磨き抜かれた刀剣を思わすその美貌に一体どれだけの人が心奪われてきたことか。

彼女を陰で好いている男の数は知名度から考えて、三桁は行ってもおかしくないですね。

そんなモテモテのエラーナさんが律儀に処女を守っていたのは付き人としての責任感からと、三人目の光の騎士確実と言われていたアトム君の存在があったからでしょう。

それにしてもこのアトム君という子、妙なところで奥手ですね。アクイム君の記憶を読むに性格は男らしさに拘りつつも公明正大を地で行く感じで、容姿は私も直接確認しましたが中性的ではあるものの、中々の美形さんです。付き人は処女でなければならないと明文化されていない以上、そんなアトム君が求めればワンチャンあったでしょうに。それとも婚前交渉はしないというのがアトム

君の言う男らしさなのでしょうか？

周囲の人達もそんなアトム君が相手なら仕方ないと諦め、エラーナさんのことは高嶺の花を愛でるが如く、遠くからひっそりと眺めるに留まっていたようです。ただ一人、私の大恩人にして空気の読めない男ナンバーワンであるアクイム君を除いては。

そんな人気者のエラーナさんがアクイム君の付き人になったのですから、さあ大変。きつとこの三日間、光の魔術学院の関係者達はエラーナさんの話題で持ちきりだったはずです。

ああ。きつと皆さん、アクイム君に憎悪と嫉妬を募らせつつも、その頭の中ではエラーナさんがアクイム君にどんな風に犯されたのか、その想像に忙しかったことでしょう。

だから今日は知りたがり屋な皆さんの為に、エラーナさんの処女を奪って調子に乗りに乗っているアクイム君の姿をお披露目しちゃいます。

エラーナさんのような素敵な女性をモノにして調子ぶっこいているアクイム君。これで恨まれなはずがありません。ふふ。楽しみです。さあ今日は喰べ歩きますよー。

そんなこんなで、アクイム君はエラーナさんを連れて光の王国の有力者さん達のお宅を回りました。

成果は上々。流石にお年を召しておられる有力者さん達は強したかなもので、アクイム君に対して安易に敵意を抱いたりしませんでした(嫌悪ならありましたけど)。しかし彼らのお子さんであり、エラーナさんの同級生さん達は話が別です。

この日の為に私が超頑張つて、エラーナさんが付き人になった初日に寝込んでしまったことを広めておきましたから、エラーナさんを心配して元ご学友の方々が集まって来るわ、来るわ。

憧れのエラーナさんを励まそうと皆さんが涙ぐましい努力をされている中、アクイム君がここぞとばかりにエラーナさんの身体に悪戯をしちゃうものだから、さあ大変。

学生時代ならアクイム君がエラーナさんの胸やお尻を触ろうものならば、容赦なくぶっ飛ばされていたでしょう。それが今や唇を噛み締めるだけで、エラーナさんはアクイム君のなすがままです。ついにはご学友の一人がキレて殴り掛かってきましたが、エラーナさんを盾にすれば誰もアクイム君に手を出しません。

憧れのエラーナさんを目の前で汚されているのに何もできない憤り。それが憎悪となつて頂点に達したところで、私が美味しく頂きました。

ちなみに本来私は人間から憎しみを喰べるのにいちいち肉体的接触を必要とはしません。

女性を犯すのはあくまでも封印を破る切っ掛けをくれたアクイム君への感謝からです。昔の私なら適当に親しい二人の内一人を目の前で殺して、怒り狂ったもう一方の憎悪を命ごと喰べていたでしょうが、小者なアクイム君はそういうことをするとビビッて腰を抜かしてしまいそうなので、アクイム君の天寿が尽きたであろう、そうですね。百年くらいは陵辱を食事の基本とすることにしましょうか。

「おい、顔色悪いぞ。大丈夫かよ？」

六軒目となる有力者さんのお宅を後にした帰り道。沢山の憎悪を喰べてほくほく顔のアクイム君とは反対に、エラーナさんの顔色は冴えません。

「心配いらない。……です」

いつも凜としたその声にも張りがありませんが、それも仕方のないことですね。ご学友の皆さん

はエラーナさんを心配してお集まりになったのでしようが、エラーナさんからすれば好奇と同情の視線を無遠慮に向けられて苦しいだけだったでしょう。

それなのに、ご学友の皆さんときたら、アクイム君に弄ばれるエラーナさんを見て男性器を大きくするんですから（まあ、私が憎悪を喰べたせいなんですからね）。

自分を心配して会いにきてくれた友人達がアクイム君に身体を弄ばれる自分を見て勃起^{ぼつき}している光景は、ほんの数日前まで処女だったエラーナさんには、さぞお辛かったでしょう。

仕方ないのでここは一つ、慰めの言葉でも掛けてあげましょうかね。

「おい、エラーナ。どんな目で見られても気にすることはねーぞ」

「え？」

意外そうな顔をするエラーナさん。アクイム君はそんなエラーナさんの肩に腕を回すと、軍服の襟元に手をつっこみました。

「くっ。だから何でお前はこんな所で」

今いるのは表通りに繋がる人通りの少ない裏道なのですが、まだ真つ昼間ですから誰が通っても不思議ではありません。そんな所でのハレンチな行為にエラーナさんは小声で抗議してきますが、アクイム君は構わずエラーナさんの形のよい乳房を揉みだします。

「んっ。……く、くそ」

声を出さないよう頑張るエラーナさん。アクイム君はそんなエラーナさんの耳の中に舌を突っ込むと上へ下へと舐め回します。

レロ、レロ。レロ、レロ。

「んっ!? や、やめろ。きたな……ひっ!? ば、馬鹿。入れすぎだ」

頑張つて舌を伸ばしていたらつつい人^{ひと}の限界を超えてしまい、驚いたエラーナさんが普通に悲鳴を上げちゃいました。

いけない。いけない。励ますのが目的でしたね。

反省した私（じゃなくてアクイム君）はエラーナさんの耳から舌を引き抜きます。そして耳元で愛でも囁いてあげようとした、その時でした。

ふと、美味しそうな匂いが漂つてきたのです。

「何だ？」

アクイム君が振り返つてみれば、あらビックリ。人の頭より大きな氷柱が、へい、お待たせ！ とばかりにアクイム君の顔、面目掛けて飛び込んでくるではないですか。

いやゝ、これは驚きですね。仮にもアクイム君は大臣の息子で今や光の騎士。殴り掛かってきた生徒もその後親御さんにメツチャ殴られたというのに、今度はまさか白昼堂々殺しに来る者が現れるとは。

アクイム君、嫌われすぎてマジ愛おしい。

内心で笑いを堪える私。アクイム君が指をパチンと鳴らせば氷柱は砕けて消えます。砕けた氷が大気に散つて美しく舞うその向こうには、腰まで伸びた銀色の髪を自身の魔力で淡く発光させた物凄い美少女さんが立っていました。

美少女さんはエラーナさんが着ている軍服によく似た詰襟の服を着ていますが、黒を基調としたエラーナさんの軍服に対して美少女さんの服は白をベースとしており、まるで対の存在みたいです

ね。

胸はそれ程ではありませんが、左右の身体のバランスが物凄いレベルで一致しています。黙って座っていたらお人形さんと勘違いする人がいても不思議ではない、それ程の美少女さんです。

美人で有名と言ったらエルフですが、この子の美貌は人間でありながらエルフにまるで引けを取っていません。唯一の減点ポイントがあるとしたら、やはり服装でしょうか。

同じ美人でも凛とした雰囲気のエラーナさんは軍服がよくお似合いです、目の前の美少女さんには今一つといった感じです。いえ、決して似合っていない訳ではないのですが、美少女さんにはフリリのドレスとかそういった可愛らしいものの方がよく似合うと思うんですよ。

それにしても、ふむ？ よくよく観察してみればこの美少女さん、どこかで見た顔ですね？

「ミ、ミナ!？」

エラーナさんが声を上げます。そうでした。そうでした。彼女はミナさん。エラーナさんやアクイム君の一つ下の後輩さんで、確かエラーナさんの妹さんと仲がいいんですでしたね（アクイム君情報）。見れば誰もが納得するでしょうが、ミナさんは入学前から話題になる程の美少女さんで、性格は寡黙で真面目。アクイム君にしつこく言い寄られていた所をエラーナさんに助けられている内にエラーナさんと同じ格好をした、エラーナさん大好きっ子なのです。

美味しいご飯の予感に、アクイム君が下卑た笑みを浮かべました。

「おいおいおいおい。ミナ、これはどういうことだ？ テメー自分が何をしたか分かってんのか？ 今のは、れっきとした殺人未遂だぞ。殺人未遂」

人の社会における最大の禁忌を犯しかけたというのに、ミナさんの表情に動揺はなく、その冷た

い視線はまるで氷のようです。

そして彼女は風鈴を思わす涼やかな声音で宣言するのでした。

「アクイム、貴様を殺す」

「くっくっく。やってみな」

突然やってきたメインディッシュを前に舌舐めずりをするアクイム君。さあ、可愛らしいお人形さん。共に憎悪が満ちる快樂のしとねへと参りましょう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>